

昭和五二年二月一〇日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社

発行人 滝野 忠

東京都千代田区飯田橋4の4の8朝日ビル401号室 電話(03)26117079
振替 東京0158431 労金 東京労金本店No50234

購読料 月額400円 6カ月前納制

〈もくじ〉

■ 巻頭言 ■

拝啓 石橋 委員長様 2

社会党の前進に新たな芽 3

— 社会党の意義と課題 —

◇ 座談会 社会党大会をふり返って ◇

「新宣言」は 続開大会へ 7

債務問題とラテンアメリカ 15

読者からのおたより 18

旬刊 社会通信

NO.288

一九八六年一月二日

一九八六年一月二日発行
(毎月一日・二日・三日三回発行)

■巻頭言

拝啓 石橋委員長様

『社会新報』の年頭所感、拝見しました。この間の委員長の考えが吐露されているものと、真剣に読みました。正直言って本当にガッカリしています。石橋さんは遠くに行ってしまうわ、そんな感じがしてならないのです。

入党して十三年。成田・石橋体制といわれた頃、現場と党中央は、私の住む長崎の離れ小島からも近いものを感じられました。あれからいろんなことがありました。しかし、「社会党までも分かりがよくなっちゃいかん」と、石橋さんが「非武装中立論」を出された時、胸を弾ませて学習会をやり、支持者に一読を勧めて回りました。五年余り前のことです。

委員長に就任されて二年有余、「ニュー社会党」を説かれ、「大胆な脱皮と再生」をさかんに口にされます。世の中が急激に右旋回している時、ニュー社会党のいくつかは、もの分かりのよくなる方向ではないのか、との疑念をもったのは私一人ではないと思います。事実、委員長は「肝心なことになると、党内の激しい抵抗にあつて改革は不発あるいは中途半端に終わっている…」と言われます。当然ではないでしょうか。「自衛隊違憲合法論」「韓国問題」「原発容認」、そして「新宣言」です。賛成できるはずがありません。

違憲合法論が出た直後、長い間、反基地闘争に参加している関西の友人が手紙をくれました。「昔は自衛隊に抗議文を突き付けると、基地指令が応対した。党の後退につれて相手もレベルを下げ、違憲合法論が出たとたん、抗議文の受け取りも拒否するようになった」と侮しそうに書いてありました。どうか現場の者にこんな思いは二度とさせないでほしいのです。最後に肝心の「新宣言」について申し上げます。「執行部案は党内の勢力分野を反映したものと本当にお考えですか。全党の合意と言うならば、合意が得られるものを作るべきです。長い党の歴史とは無関係に偏った路線で一方を排除する内容ゆえに、三分の一を越える代議員が反対していると思います。

さらに不可解なのは、代議員すら三分の一も反対しているのに、修正に応じようとしてもいない委員長のかたくな態度です。大会代議員の構成は、国会議員に無条件で代議員権が与えられているために、全党員の意思を正しく反映するものとは思えません。大会は党の最高の意思決定機関です。執行部のリーダーシップを否定するものではありません。大会に表明される「全党の意思」をもう少し汲んでほしいと思うのです。

さらにお尋ねしたいことは、中執案というものは絶対不可侵なのですか。もし指一本ふれてならないものならば、下部討論はまったく意味のないものになってしまいますね。たしかに、草案↓下部討論↓中執案↓下部討論↓大会討論↓決定という民主的ルールを通っているようにみえます。しかし、その内容が問題なのです。党の性格や今日の情勢から満場一致がベストだと思います。今の時点でその実を生み出し得るのは、委員長あなたしかいないはず。どうか勇気をもって決断下さい。

ところで、続開大会は一月二十二日だそうですね。この日は、私の思想的恩師である向坂逸郎先生が亡くなってちょうど一年目に当たります。何かの因縁なのでしょう。

言いたいことを申しました。私も「社会主義の理想は、温暖春の如くであるが、その道行きには、冬がある、氷がある、雪がある」という堺利彦の言葉をかみしめ、今後とも日本社会党と共に歩み続ける決意です。どうか「元気でのご指導」を心からお願ひし、ペンを握ります。

社会党の前進に新たな芽

— 社会党大会の意義と課題 —

はじめに

日本社会党第五〇回全国大会は、周知のように統開大会となった。近年の党大会としてはきわめて異例なことである。しかもその内容が、いわゆる「新宣言」の決定ができないまま、統開大会となったのである。社会党内には、さまざまな思想潮流が現存していることは否定できない。だからといって綱領的文書を小委員会で採択によって決めるといふ運営、そのうえ本会議では採択されずに、統開大会に持ちこまれた例は、党史の上でも希有なことである。それだけ「新宣言」の内容は未消化であり、反対が強かった証明でもある。

まずはじめに石橋委員長や全電通労組と同じように、新宣言の決定に熱い支援をおくってきたマスコミ関係は、五〇回統開大会をどのように見ているかを聞いてみるのも無駄ではあるまい。

朝、毎、読ともそれぞれ社説のなかで党大会を論説している。まず、いまやサンケイ新聞とならんで右の報道機関となっている読売新聞は、ニュー社会党の事実上の綱領となる「新宣言」の採択を、次の大会へ持ち越したことは、「きわめて遺憾なことである」としたうえで、「これにより、同党のイメージ・ダウンが増幅されることは避けられず、野党第一党としての責任が問われることになろう」と述べ、つづいて「このことは、これまで二年余にわたる党内論議を経て、なお、同党が現実路線を歩むことについて、十分消化し切れていない黨員がいることを示している」。そして最後に「社会党再生には、明らかに赤信号が出されたといえよう。委員長は、党改革に向け、これまで以上の情熱とリーダーシップが求められようが、それ以上に必要なのは、黨員自身の徹底した意識改革であろう」と結んでいる。どこか冷ややかな態度である。

また、毎日新聞は、「相も変わらぬ古い体質が露呈され、『ニュー社会党』がめざした『大胆な党の脱皮と再生』が、遅々として進んでいないことが明らかにになった」と落胆し、「新宣言は、ソ連・東欧型のマルクス・レーニン主義と決別、現実路線を鮮明にしたものとなっている」と評価し、統開大会での決定を強く望んだ論説となっている。

最後に、新宣言の決定にもっとも熱意を燃やした朝日新聞は、前段で「大方の予測を超える荒れようというべきだろう」として、「多くの社会党支持者やニュー社会党路線に期待を寄せてきた人たちに『またか』という失望を与えたことは間違いない。『休戦協定に調印するつもりで満場一致の採択を』と呼びかけてきた執行部の中にも、落胆と無力感が漂っている。しかし、今度の大会の紛糾のもとには人事をめぐる醜い派閥争いだったわけではなく、政党の根本である綱領の改定をめぐる論争だったのである。しかも、新宣言はマルクス主義的社会主義の党から西欧型社会民主主義の党へ思い切った転換を図るものであり、論争が起きなかったとしたら、その方がむしろ不思議といたいくらいだ」として、左派にたいして次のようにみている。

「修正を要求していた活動家層は、最左派の社会主義協会党員と福岡県本部を中心とする太田協会系、それに高知、新潟など各地の反原発運動の関係者の連合軍だった。これらのグループの要求や発言で残念に思ったのは、従来の社会主義観にこだわるのはわかるとしても、社会の変化への対応や社会党の改革についての提案が聞けなかったことである。また、反原発派は党内の容認論を一切否認するよう迫るなど、社会党の幅を狭めるような主張を展開した。こうした左派グループの主張は、せんじつめれば『社会党は抵抗の党として純粋性を保つべきだ』という考え方になるが、これは『抵抗の党か？政権をめざす党へ脱皮する』というニュー社会党の行き方と食い違う」とご丁寧にも左派に忠告したあと、「社会党はいまや、がけっぷちに立っているのである」と警告している。

長々と各紙の論説を引用したのは、いうまでもなく、新聞を宣伝したのではない。この論説のなかに本質が語られているからである。各紙はこぞって、新宣言の採択を強くのぞんでいたその理由は、新宣言の決定によって日本社会党が右翼社民の党へ脱皮（脱落）することにあり。したがって、われわれは右翼社民の党への転落に歯止めをかけることに成功した大会として評価することができる。

原案に固執した執行部

新宣言は、作業小委員会の草案の段階では、全党員が反対と断言していたほど反対が強かったし、基本的な内容を変えなかった中執原案にたいしても、党員の八割以上は反対であった。大会代議員にたいする強い締めつけによって、心ならずも原案賛成の立場に立った党員や、党の運営上中執原案を廃案にしたら「まずい」という党内常識などによって、大会では原案賛成者が多数を占めていたが、心から内容に賛成している代議員は、一人ひとり聞いてみたら全電通代議員などほんの少数であったはずだ。

大会では、福岡、千葉、大分、新潟、高知、香川など一〇〇名の代議員の連名によって修正案が提出された。各県本部の事前討論でも、石橋委員長の所属県本部である長崎県本部も反対の態度を決めたし、堀・土井両副委員長の地元兵庫県本部も反対の態度を決定していた。

綱領決定にあたって、大会の五分の一以上の代議員が共同で修正案を出した段階で、綱領（新宣言）決定を先送りにするか、あるいは修正案提出の代表者と協議して、内容修正をはかるか、どちらに態度を決定するのが執行部の民主的態度であらねばならない。党運営はこの機関でもそうしている。しかも新宣言の決定は、満場一致という前四九回大会の決定がある。

（修正案の内容については、さまざまな方法で読者の諸氏には伝えられていると思われるので、簡単に記述しておく。その第一は、論争になった多くの点は削除し、タナ上げする。第二は、はじめの項に「綱領」「道」を歴史的文書にするを改め、党の決意を盛りこんだ「新宣言」とするものであり、第二は、過程社会主義の文言を修正して、社会主義観を正す内容である。第四は、それとの関連で、社会主義運動を社会主義と規定している文章に、運動の字句を挿入するものであった。内容には基本的に反対であり、廃案を求める党員多数の意思からすれば、きわめて弱い内容であった）

しかるに、執行部は修正にはまったく応じない態度に終始し、新宣言が付託されている運動方針小委員会で、修正案提案者と執行部との協議は二分間程度の時間で二回持たれたのみであった。

そのような経過のなかで、執行部は反対派の一部を抱きこむように、はじめの項に「自民党にかわって」という文言をつけ加えることを提案した。これでは修正ではない。もともこの文言は、悪名高い作業小委員会の草案の段階であった文書の復活にすぎない。

このようにかたくなに原案を通そうとする執行部に呼応して、森下運動方針小委員長は横暴にも討議を打ち切り、田辺書記長の報告をまって、満場一致の決定を宣言した。これを不服として代議員につめ寄せられた結果、小委員長も前言を撤回し、採択をおこなった。結果は賛成九三対反対五四で議事としては可決された。(綱領の決定は規約一〇〇条によって三分の二以上の賛成がなければ採択されない。ただし、小委員会は議事規則によって、過半数の賛成によって採択できる、という見解をとったためである。この問題について、規約と議事規則の関係が不明確であるが、より以上に重要なことは、綱領・規約は三分の二以上の規定はあるが、現実には満場一致であって、いままでも例のないことである。この点からも綱領決定で採決をおこなったことは、まったく異常、異例なことである)

本来満場一致決定しようとするれば、小委員会採択前に調整すべきである。しかも、修正案提出者は修正案の調整に応ずる柔軟な態度をとっていたのであるから、なおさらである。しかし、中執、なかでも石橋委員長の態度はかたくなであった。

大会の最終日、今度は決定するには三分の二以上の賛成者がなければ、採択しても決定にはならないことは明白である。三分の二以上の代議員の確保の見通しが困難であること、そして何よりも満場一致の決定をはかるために、大会議長団をはじめ中間派の人たちも、それぞれの立場で党内一致をはかるために積極的に行動した。これらの意向を尊重して、修正案提出者は意思統一のために執行部との協議に応ずること、修正案の大部分を取り下げてギリギリの妥協として、おおよそ次の三点を示した。

第一は、「はじめに」の項のうち綱領、道を歴史的文書とするを改め、「このような反省と時代の変化と党自体の前進をふまえて、日本社会党が再生し、勤労国民とともに政権を担う党に発展する決意と方向を明らかにして新宣言を定める」を挿入する。

第二は、社会主義の下に「運動」の字句を挿入するなど文体の整理。

第三は、「今日では連合政府は普通のこと、どの政党との政権関係にも積極的に対応するという文書を削除する」という提案であった。大きな後退であるが、党をまとめるための譲歩である。

しかるに執行部、とくに石橋委員長は一字一句修正できないとして、これを拒否した。そのため、大会議長団も調整を断念して、大会運営委員長とはかって統開会大会となったのである。

石橋委員長は大会冒頭のあいさつのなかで、「お互いに歩みより、一致点を見い出すことに習熟する以外にない。いつまでも、自己主張に固執してはならない。意見の違うものを排除するようなくことは、共同戦線党になじまない」と力説した。

また連合政権を成功させるにも意見の違うものを、連合させることに習熟しなければな

らないことも強調した。このことを強調すればするほど、その声は空虚な響きとなる。まず何よりも党内合意をはかることに習熟することが委員長みずからの課題である。

一部労組幹部の恫喝に屈してはならない

大会の討論は反対意見が圧倒的多数であった。内容的にも現実のたたかいをふまえた発言も多く、謙虚に聞けば誰でも納得できる内容であった。また運動方針小委員会では、国鉄の「分割・民営化」に反対してたたかっている現状報告とともに、党が民営化反対の方針を下げるべきではないとの主張が強くなされ、執行部も分割・民営化反対の基本的方針は変えない、と答弁した。他にも組織・機関紙・財政小委員会でも重要な討論がおこなわれたが、ここでは割愛する。

目立ったことにふれておくと、全電通労組代議員の横暴さと、相手かまわずかける恫喝である。大会運営委員会でも最後まで採決を主張し、そのうえ大会場でも統開大会にする運営委員長提案に野次と怒号をあびせていた。社会党大会を我もの顔で横行したうえ、党の分裂まで平気に口にする。そして、国会議員や同候補にたいして、新宣言に賛成しなければ選挙を応援しない、と公然と恫喝をかけた。さすがこれには、選挙には弱い代議員でも怒りをかくせなかった。

全電通労組幹部は大会後も機関紙で統開大会になったのは、協会、社青同の暴挙だとし、みずからの非を逆宣伝に使い、党を社民党に転落させようと画策している。それができないれば社会党は分裂せよと迫っている。党の主体性を守るためにも、全電通労組の一部幹部の横暴を許してはならない。

大会の成果に自信

朝日新聞の論説のように、社会党は、もう後がない。がけつぷちであるという議論は、石橋委員長もそう発言するし、大会発言のなかで新宣言に賛成した宮崎の代議員も同じ発言をした。われわれの思想やたたかいは無縁なものである。百歩ゆずってこのようにことが正しかったとすれば、がけつぷちに立った党は他の路線を選択することは許されない。全体が一丸となって活路を求める以外にない。

かつて社会党は、保革連合でつくった片山内閣、芦田内閣の失敗の経験をもっている。比較第一党であった一四三名の議席が一举に四八議席に転落した。その後一〇年の努力によって回復させた貴重な経験である。この失敗を二度とくり返してはならない。

今五〇回大会で左派連合が結成された。それも従来派閥連合でなく、都道府県本部の活動家中心の集まりである。これは画期的な前進の芽である。また一方で国鉄の分割・民営化署名は史上最高で三千万名をはるかに超えた。このように現実のたたかいの前進もある。党、総評とも中央の右傾化の動きは早いけれども、決して失望することなく、理論闘争を強めるとともに反行革のたたかいを強めれば、必ず右傾化の流れを変えることができる。そのことを証明した大会であったと自信を深めている。

「新宣言」は続開大会へ

— 社会党大会をふり返って —

社会党大会は焦点だった「新宣言」を一月二二日の続開大会にもちこした。「新宣言」に執行部が想像していた以上の批判が寄せられたからである。

本誌では大会直後、五人の方にお集まりいただき、第五〇回大会をふり返ってみた。読者諸賢の参考にしていただければ幸いである。

(編集部)

司会 社会党大会の焦点だった「新宣言」は社会党の良心を代表する「修正派」の結果の力のまゝに採択できず、続開大会にもちこされました。じつに愉快でいいことです。石橋委員長が大会直後の記者会見で「思わぬ展開になって残念」と思わず本音をもらしてしまつたと、あるいは「新宣言」推進の本体である政構研、全電通などが、大会前から「今度の大会は『新宣言』に全力をあげ、原発を次の大会でやってもらう」と述べていたことを考え合わせますと、政構研の流れに組み合せていた人びとのあわてようがわかるうというものです。

しかもこの大会は、「ニュー」を強調する人びとが、じつに「オールド」な体質をお持ちのことをみせてくれましたし、社会党の新たな胎動への動きも垣間見せてくれたように思います。そうした点をふまえながら大会の意義と経過、続開大会への展望について広くかつ自由にお話しいただきたいと思います。

Aさん、まず大会の意義、特徴についてお願いします。

大会に二つの特徴

A 私は三つの特徴があったと考えています。

第一は、「新宣言」はあれではダメだ」というまじめな党員の下部討議の成果が、大会に具体的に反映したことです。

第二は、その結果として「新宣言」に反対する「連合戸」ができたことです。この「連合戸」について「四派連合」などさまざまなかたちでいわれています。しかし、こうした認識は正しくありません。というのは、その実態は社会党の良心を代表する代議員の横断的な各県有志という「連合」だからです。

県としてまとまっておいたのは福岡、香川、高知、大分、熊本、新潟、千葉、そして兵庫……

B それに石橋委員長のおひざ下の長崎。

A 長崎があったね。

司会 長崎の代議員は修正案に名を連ねておりませんが。

A 委員長の出身県として遠慮したのでしょう。しかし、県委員会では満場一致で「反対」を決議しています。

この他の県からも有志が二人とか三人とか、あるいは一人の所もありますが、沖繩から北海道まで二一都道府県と支持団体の社青团が結果したわけです。修正案には百人の代議員が名を連ねました。念のため申し上げておきますが、さきほどの長崎の例のように、「新宣言」に反対の代議員はこれだけじゃない。名を連ねたくとも選挙の関係とか、右派との関係などできない人も多い。そうした代議員を除き、百人の人びとが名を連ねた。こうしたことは今までの大会にはなかったことで、この結果が修正案の統一に成功した原動力となった。

修正案が派閥の思惑によって生まれたものではないことは、これで明らかでしょう。社会党の危機をなんとか乗り超えたいとする「愛党精神」にもとづく党建設上の危機感、さらには「保革連合」にいきかねない党中央の動きといった心配が、修正案の統一をつくりだしたのです。

第三は、左派の修正案と百人の代議員の結果が予想をはるかに超えた代議員の共感を呼んだことです。当初、中間派的人びとは「(「新宣言を」修正しなくてもよい」といっておりました。しかし、百人にのぼる修正案の提出で彼らも「修正しなくては」との意見に変わりました。つまり、修正を求める人びとの発言に迫力があつたものだから、討論の流れが大きく変わったというわけです。

こうして、これは多くの感想ですが、今度の大会はこれまでにないいい大会だったと思います。

聞く耳もたぬ執行部

司会 私になによりも驚かされたのは、大会運営もさることながら石橋委員長、田辺書記長の発言です。これらについては後ほど詳しくうかがうことにしてBさん、大会の経過について少しくわしく報告いただけませんか。今度の大会を、マスコミや政構研、全電通は「左派が大会を混乱におとし入れた」かのような宣伝をしているからです。この意味で経過を正確につかんでおくことが重要なように思います。

B けっして難かしいことじゃありません。運動方針針小委員会で(「新宣言」は)たんと議論され、たんとと修正案が提案されて議事は進んでいった。私たちは「満場一致」ということをくり返し主張した。したがって修正案はだしたとはいえ、「満場一致ということになれば、譲るべきところはもって譲らなければならぬだろう」と考え、大胆に譲るべきところも相談し、用意もしておりました。

修正案が出された直後、「執行部と話し合いをやりなさい」ということになり、運動方針針小委員長をいれ、話し合いをやった。ところが、執行部ははなからまじめな話し合いを拒否し、一応「意見を聞く」というかっこうだけだったんです。つまり、最初から「字句の修正は難かしい。それ以外でなんとかならんか」というわけです。「そんなわけにはいません」と私たちは答えざるをえない。百人もの代議員が連名しているわけだし、私たちは第一線活動家や機関の要望を担ってきたわけですからね。

二回目の話し合いはもつとひどいんだな。「どうしましょうか」というのではなく、いきなり「自民党にとってかわり」という文句だけいれる」というんだ。一方的な通告です。そして、「これ以上はダメ」と。しかも、この「修正」がでたらめだ。この文句をわれわれが修正を求めているところではなく、「はじめに」の項のどうでもいいところに入れるというんです。しかもこの文句はもとと作業委員会の案にあったものです。

執行部の修正は偽騙

司会 正確を期しますが、「自民党にとってかわり」という文句を「はじめに」の項の「政権を担当する党としての能力と決意を国民の前に明らかにする」というくだりの前に挿入するということですね。

B そう。そして他は一切ダメと。これではぜんぜん具体的じゃない。だって、ここでは「能力」と「決意」がいわれているだけですからね。

司会 ようするに修正したことにはならない。

B だからわれわれは「なお話し合いをやるう」と主張したら、「新宣言」賛成派の諸君は強硬に採決に転じた。「採決はやるべきじゃない」と主張したのはわれわれです。ところが、運動方針小委員長は突如、「満場一致承認してほしい」といいだし、そこで議長席につめより抗議する一幕がおきた。

C その前に書記長が「集約めいた」発言をしますね。

B しかし、「新宣言」が決まってから、いろいろ議論したって何の役にもたちません。ようするに、そんなものでごまかそうってわけです。

しかも、この時点ではどういう採決の仕方をするのかもはっきりしてはならず、執行部で話し合いをしている最中です。採決にあたって、われわれは「採決するのはけっこうしかし明日の本会議はたいへんになりますよ」と申し上げた。三分の二ですすからね。

採決にあたってわれわれは、「本会議で三分の二のものは委員会でも三分の二」「無記名投票」を主張した。ところが小委員長はじつに横暴だった。「そんなことはない。過半数でいい」と強弁し、「時間がない」と無視です。大事なことを会議にかけることすらないんだな。

それで強行採決。それでもわれわれは我慢して参加した。結果はご承知のとおり、反対は過半数にこそ達しなかったが、三分の一はこえた。これで私どもは「勝った」と思いましたよ。

執行部は議長あっせんも拒否

司会 ついで大会最終日、本会議に臨まれるわけですね。

B そうです。本会議ではまず大会運営委員会で採決の仕方について議論がはじまりました。私どもは「無記名」を主張しました。三分の二が必要なのは大会規約で決まっています。百名の連名でだされている修正案で、しかも「無記名投票」を代議員が要求すれば、代議員の要求にしたがうのが当然です。それが党内民主主義というものでしょう。ところが執行部は応じようとしません。自信がなかったんですね。「挙手でやってくれ」と、こういうことで大会運営委員会がもめた。

その一方で執行部は、昨日採決しているにもかかわらず、満場一致でいきいたいというんです。「それならわれわれの修正を一部いれる」といえば、「それはダメ」という。「一行も手を加えるわけにはいかない」と執行部は議長あっせんをも拒否、そこからまた紛糾するわけです。

右派は「採決」といって、さかんにネジまいて票読みやっていたですよ。ところが票読みやっている方も不安になってきたんです。執行部の主張は変わらなず、百名もの代議員が出している意見にちっとも耳を貸そうとしない。これじゃまとまりっこない。

譲歩に譲歩した「修正派」

B 私の方から統一修正案の成立についての経過を少し補足しますと、大会二日目、委員会で採決を強行しておいて、しかも原案どおり満場一致でというのではいかにも理不尽だ。本会議で満場一致と中執がいうのなら、中執も修正に応ずるべきだとの考え方から修正派の四名の代表に、議長団がギリギリ詰めたものを求めたわけです。

それについて四名の代表者がほぼ三項目の案を提出した。最初の案よりひじょうに譲ったおだやかなものです。これで議長団は中執とのあっせんに入ったのですが、中執はこれすら拒否しました。

A じつにおとなしいものですよ。「はじめに」の項の末尾を削除し、新しい文言にとり

かえる、社会主義という言葉に運動を挿入する、そして「つくる」の「連合政府」にかんする九行を削除し、その四行前の日本社会党のうえに「自民政権にかわって」をいれる、いうだけだもの。

司会 これを田辺書記長は、「新宣言を出した意味のなくなる修正には応じられない」といい、石橋委員長を先頭に執行部は「応じられない」とかたくなな態度をとり続けているわけですね。

C ですから、大会がこのように「こじれた」ことは、百名をこす代議員、また圧倒的多数の党員の声に中執がまったく耳を貸さなかったことによるのです。

思想を奪うことは人権問題

E 今度の社会党大会は路線をめぐる大会ですよ。だから、一人ひとりが自分の考えるところを率直に、素直に述べる。これがあたりまえの姿だ。

しかし、新報の議事録を読んで、じつに立派な活動家が「新宣言」に賛成の主旨で発言しているんですね。おそらく自分の意志ではなく、地域の「しほり」からだと思うのです。労働組合の大会ではしばしば見かける風景です。彼らはきまって目を伏せます。自分の本心とちがったことをいわねばならないのですから、しかもまじめな仲間ですから、そうするのは当然です。こうした右翼的な労働組合の手法が社会党大会にあらわれたことは残念です。人間の思想を奪うことは人権問題ですから。

C そうそう一つ思い出した。大会運営委員会が挙手か無記名かをめぐって論議してたとき、左派というわけではないある議員が——労働組合の幹部が監視しているなかで挙手をやるのは人権問題だ。だから——無記名にするべきだと発言したことが印象に残っています。

B 全電通などは「新宣言」に反対するものは次の選挙で推せんしないと広言しているからな。

許せぬ労働組合の介入

司会 そこで一つうかがいたいのですが、Eさん、全電通の動きは気狂いじみてますね。

E 大会直後の一九日に緊急中執を開いて三項目の方針を決めています。第一に石橋さんの「非妥協」の方針を支持する、第二に続開大会では採決による決着もやむをえない、第三に新宣言を執行部原案どおり採択させるため、重大な決意で対処するというのがその内容です。

司会 これは「社会党ジャック」としかいいようがないと思うのですが、その背景はどこにあるのでしょうか。

E 全電通の社会党への介入は七〇年代ははじめから顕著になっていますが、最近では全労協の主導権争いが絡んでいると思います。ご承知のように、全電通の政治路線は「反自民・非共産」、そして社会党内の政構研を強め、左派を排除し、民社との「和解」、つまり「合同」をはかるというものです。イデオロギー的には同盟やJCとまったく変わりません。ちがいは同盟やJC組合が民社支持であるのに、全電通が社会党支持団体であることです。このことが全電通の社会党への介入をきわだたせることになるわけです。

次に全労協の主導権争いとの関連についてです。現在の労戦の右翼的再編成は同盟と鉄を主導とするJCを中心に進められています。とりわけ鉄の重石（おもし）が一番おもしろい。鉄の労資関係が一番安定し、独占のおぼえがもっともめでたいからです。他方、全電

通には全労協の主導権をとりたいたいの思惑があります。民間企業労組として最大であること、産業構造の変化のなかで電機とともにリーディング産業として浮かび上がってきたことがその大きな要因です。だから八五年春闘では電機労連とともに、まず春闘で主導権をとろうとしたのですが、独占と鉄鋼労連の反撃の前に一敗地にまみれました。つまり、春闘で近い将来主導権をにぎれる可能性は遠のいてしまったのです。

そこで次に考えられることは、政治のレベルで主導権をにぎり、全労協の主導権に近づくことです。これが社会党と民社党の「歴史的和解」の画策だと思えます。そのために全電通は「四人組」を形成し、電機労連を「和解」の道にひっぱりこんだのです。

司会 電機労連は八五年度の運動方針で、ほんとうに唐突に「社・民の和解」をうちだしましたものね。

E 労働評論家連中もびっくりしてましたね。あまりにも唐突でしたから。鉄に対抗する意識がそうさせたといっていると思います。

司会 社会党大会でも全電通の動きはすさまじかったようですね。

A 猛烈に代議員に圧力をかけたようだ。

C 「選別」の圧力ね。

E 全電通は万が一にも「新宣言」が通らんことはないと考えていたようだから、「新宣言」がこんな扱いになって一番びっくり仰天したのが全電通でしょう。八五年一月二日付の「全電通新聞」はそのあらわれです。一面ブチヌキで「再生・脱皮にむけ「新宣言」採択せよ」「許せぬ！協会（向坂・太田）・社青同などの暴挙」とのあつかいですからね。

労戦の右翼再編とも運動

司会 全電通と呼応しそうな組合は他にどんなところですか。

E 電機労連、そして全通などというところでしょう。一月二二日付の「全通新聞」は「「新宣言」こそ党再生の道」との見出しで森原委員長の談話をのせています。「新宣言」が採択できなかったことは、誠に残念」という内容ですが、全通がこんなかたちで社会党大会にふれたのは宝樹さんが失脚してから始めてのことです。

C 石橋委員長は大会あいさつで「（労戦統一の流れを）いくらまちがっているとか、右傾化はけしからんと批判してみたところで、事態は変わらない。われわれが、そのような意識や流れのなかでどうして支持を得、力をつけるか考え、実行し、成功させない限り解決の方法はないと思う」といっています。

E 労戦再編は「政界再編の「起爆剤」の役割をも与えられているんです。全労協の「基本構想」「中間報告」はそれを明記している。労戦再編に組み込むことは、社会党解体に組み込むことにもなるんですね。

司会 いまCさんがおっしゃった石橋委員長の言葉、これ相当に深刻な内容ですね。

C そうなんです。労戦再編の流れを批判するだけじゃだめ、そうした流れのなかで支持を高めなければいけません。そして、「新宣言」がその道だということでしょう。

E 労戦再編は独占、政府自民党の意志でもあります。それを批判しないでどうして社会党への支持が高まるんでしょうね。私には理解できない。

C 労戦では全労協への参加、そして政治の領域では自民党への「参加」、つまり保革

連合です。

支持率低下に拍車

司会 例の違憲合論いらい社会党の支持率は凋落に拍車がかかりました。新宣言はそれをさらに加速する役割を果たしているように思うのですが。Bさん、労働組合における支持率の推移はどうですか。

B 低水準で推移しているのが特徴です。まず「朝日」ですが、一二月の調査では一五％です。石橋さんが委員長になった八三年頃は一九・一六％でした。ところが八五年の六月、都議選直前に一四％と五年の左右合同以来最低です。ですから、いわゆる「社会党離れ」は進行中です。「読売」一二月調査では一〇・六％と傾向は変わりません。

司会 鉄鋼労連の調査が話題となりましたが。

B 全労協型労働組合の実態をそのまま示す結果ですね。政党支持率ですがトップが自民党の一六・一％（一六・六％）、つづいて民社党の一・二％（一七・四％）、第三位が社会党で一〇・二％（二三・九％）、公明党一・七％、共産党〇・六％というものです。△△内は四年前の調査▽

新聞は「自民党がトップに」を大きく伝えましたが、前回調査は一六・六％だったのだから、たいしたことではありません、もっと重大なことは、社会党、民社党の支持率がそれぞれ一三・七％、六・二％も落ち、その結果、支持政党なしが三三・三％から五五・三％へと、じつに二二・〇％もふえていることです。単純にいえば社会、民社の支持者が両党に失望し、支持政党なしに移った結果、自民党が浮き上がったというかたちです。

E 私なんか組合を取材して歩いてますから、この意識調査の結果はじつによくわかるんです。鉄鋼労連など全労協に集う組合は、まったくいいほど労働者らしい政治教育をやってません。社会主義の批判だけといってもいい過ぎじゃないですね。そして体制擁護です。日常のたたかいにしても大事にするのは労資関係、資本の顔色ばかりうかがっています。労働者のことはちっとも考えていない。そしてまた、こうした労働組合に社会党、民社党ともに顔色をうかがっているわけですから、支持が減るのはあたりまえです。とくに鉄鋼労連は民社党支持ですから、鉄連にとっても事態は深刻だと思えます。

司会 組合の組織率は減少する。自民党の力が現時点では野党をはかるに凌駕している。そのうえにこれらの組合は独占、政府自民党とたたかう構えはまったくない。こうしたなかでモノをとるためには自民の「政治力」に頼るしかなくなる。こうして、自民党、そして独占資本とのゆ着は強まらざるをえないという図式ですね。

E そういうことです。最近の特徴は官公労にもそうした傾向が目立つことです。心配な動きです。

問われる党内民主主義

司会 それにしても石橋委員長の発言にはたまげました。

C あれはひどいね。とくに「新宣言は」執行部を構成する一人ひとりが歩み寄り満場一致でまとめたもの。だから満場一致で承認してくれ」には驚きをとおりこし、あきれはてた。だってこれまでも運動方針にしる、種々の文書にしる中執で採決したことはない、全部満場一致でしょう。石橋委員長の論理では大会自体がいらなくなってしまう。こんな民主主義をじゅうりんする発言は、黨員や党の支持者をひじょうに愚弄するものです。形

式的な民主主義すら破壊するものですからね。

A 党内民主主義がいかに無視されてるかが今度の大会にできましたね。

B 修正を求めるわれわれもこの問題を強く意識させられた。だから譲れなかったわけだ。しかも委員長は「執行部には党内のあらゆる潮流が入ってる」というんです。あたかも今の執行部が派閥の代表みたいにされてしまっている。こんなばかなことはないですよ。そんなことを考えてる人はいないもの。

問答無用とはこのこと

司会 それから「共同戦線党なんだから満場一致で」という発言もあった。

C これも本末転倒です。すっかり党の路線を変えておいて——たしか「朝日」の社説でもいってましたね。「マルクス主義的社会主义の党から西欧型社会民主主義への思いきった転換という綱領の改定をめぐる論争だ」と——左派は黙れというわけです。黙るわけにはいかんですよ。

共同戦線党だったら百名もの代議員が要求している修正に応じるのは、これもまた当然です。さらに全国の社会党の第一線の活動家党員の討論集会では「新宣言」に反対する仲間が圧倒的に多い。

司会 「新宣言がとらなかつたら」「懐に辞表をもってる」との発言もあった。

A 「ダメならやめる」とね。さきの党内民主主義とも絡む問題です。

B 「新宣言」は綱領的文書ですからね。「八〇年代路線」や「社会主義の構想」のように全面的に譲歩するわけにはいきません。しかも執行部は「八〇年代路線」の付帯決議を全部無視して、また勝間田さんもいのように「社会主義の構想」をさえ右に逸脱して、「新宣言」をだしてきたわけです。

大会で決めたことが気に入らんから「委員長をやめる」といった委員長はおそらくはじめてでしょう。社会主義政党、革新政党とは、大会でみんなが決めたことを先頭に立って実践する指導力が委員長の役割だと思いますよ。ところが、決めるものまで自分の思うとおりでなきゃだめだというのだから、「党の上に個人をおくのか」とずいぶん批判がでてた。

C 長崎でも反対だったというのは、「新宣言」なるものの中味がいかに悪いかを示すものですね。「新宣言がそのままおれば社会主義政党として命とりだ」との立場から全国的な批判になった。

B 大会代議員は反対の機関決定までして大会に臨んでいるんです。発言しないでは地元に戻りませんよ。

新宣言に未来はない

司会 社会党の路線転換の理由に、よくヨーロッパの社会党、社会民主党の例があげられ、さらに石橋さんは「新宣言」がとらなければ社会党に未来はないといっています。ヨーロッパの事情に詳しいDさん、日本社会党は「新宣言」を採決すれば「政権を担える党」になれますか。

D ぜんぜんないと思う。歴史的条件がちがいます。たとえば西独の社会民主党のバードゴードスベルグ綱領、これたしか一九五八年です。マルクス主義を放棄しました。日本で

は社会党から右派の諸君が脱落して民主社会党をつくったのは一九五九年ですね。この党を独占資本、マスコミはあげて支援した。ところが、民社はそれから二五年間、まったく伸びておりません。いわゆる高度経済成長で社会・経済構造に決定的な変化がおき、階級政党が旧くさくなつたのなら、高度成長期の入口で民主社会主義↓国民民主党を主張した民社党がもっと伸びていいはずですよ。ところがそうはならなかった。

次にフランス社会党です。エピネー宣言のことがよくいわれます。一九六八年です。これでフランス社会党は左にシフトを移しています。その後、党首のミッテランは共産党以上に統一戦線を主張しました。保革連合ではありません。こうしてフランス社会党はドゴール派の凋落とともに力を蓄えた。明確に右に転換するのは政府党になってからのことです。

スペインのゴンサレスの党も同様です。運動方針案から「マルクス主義」という文言を削除したことによってではありません。この国は一九三九年から約四〇年も続いたフランコの独裁体制を大衆運動で打倒し、民主主義をたたかいたのです。大衆運動がファッショ政党、保守党を解体状態に追い込み、スペイン共産党が「ユーロコミュニズム」から自壊状態におちいったことによって、ゴンサレスの党、つまり社会主義労働者党が政権党になる条件がつけられた。

だいたい政権をとる前に、時の政権党にもわかりよくなって、政府党になった例は皆無だと思えます。この意味で石橋執行部の政治感覚はまったく理解できません。選挙に勝てるわけではないと思いますよ。逆に未来はないといえると思います。

大衆運動の強化から

司会 統開大会が一月二二日に開かれますが、最後に統開大会の展望とそのポイントについてうかがいたい。

B 私は執行部の態度いかんだと思いますよ。つまり、執行部が公にしたことを実行しようとするのかどうか。これが最大のポイントです。執行部のみなさんは共同戦線党だとくり返し語っています。そうであるならあれだけの修正意見があるのだから、当然とりいれるべきです。すべてここにかかっていると思う。

第二は、統開大会の結果がどうなるかと党建設に全力をあげることです。今の党づくりは長続きしません。これからの社会党をしょって立つ気概と気迫をもった党員を大衆運動のなかでつくる。その条件はかつてなく成熟しています。予算だってそうでしょう。大会では新宣言が焦点だったから影に隠れてしまつたが、国鉄「行革」への発言はものすごくあった。こうした力が相まって社会党の良心を代表する修正意見が力を得たことをおさえておくことが重要だと思えますよ。

A それに、短期的な直接の結果がどうなるにせよ。右傾化阻止のための地方からの左派連合ができたことは最大の成果でしょう。党の真の再建・強化を早晚勝ちとする力が、一部労組幹部等の狂気じみた介入・妨害にもかかわらず組織されはじめたのですから、展望は切り拓かれたといつていいでしょう。

司会 ご多忙のところ、ありがとうございました。

債務問題とラテンアメリカ

史上最高の会議

一九八五年七月一日〜七日にハバナで開かれた対外債務にかんするラテンアメリカ・カリブ労働組合会議は、この地域の労働組合運動史において特異の行事であった。

会議には、四六のナショナル・センター、一三五の産業別ないし地域組織、一六の農民組織、九つの地域的国際的組織の代表が出席した。全部で、ラテンアメリカとカリブの二十九カ国の一七七組織から三三〇人の組合員が参加した。労働組合の設立した研究所代表とその協力員も参加した。

キューバ（会議主催国）の労働組合中央組織（CTC）議長ロベルト・ベイガは、歓迎の辞でこういった。

「ラテンアメリカとキューバの労働組合運動のあらゆる政治的哲学的傾向の代表が、相互の絶対的尊重、自由、民主的平等にたつてここにつどい、あらゆる問題を取上げようとしている。

この地域では、どの国際組織にも属していない組織で構成され、独立しているために、きわめて重要である労働組合勢力が存在することを指摘しなければならぬ。こうした組織を代表する労働組合幹部が、この会議に出席した代表の大多数を占めている。

ブラジル、アルゼンチン、ボリビア、ウルグアイ、ベネズエラ、パナマ、ニカラグア、そしてもちろんキューバといった、組織された労働組合運動のほとんどすべてがここに出席している。ペルー、コロンビア、エクアドル、ドミニカ共和国、コスタリカ、マルチニク、グアドループ、カイエンヌといった地域も、組織された労働組合運動のほとんどが代表を出している。他の諸国の場合も、国際運動の著名な代表の参加を得てよろこんでいる。」

それゆえ会議の最終宣言は一致して、「この会議は、組織されたラテンアメリカ・カリブ労働組合運動の組織した史上最高の包括的、統一的、代表的集会であった」とうたうことができた。

債務の悲惨な影響

会議の最終宣言は、いくつかの恐るべき現実に注意を向けた。

三、六〇〇億ドルという驚くべき債務——これが発展に使われさえすれば、発展への大きな援助となるほどの巨費——をかかえているので、ラテンアメリカとカリブで一人当りの国内総生産は、約一〇年前の水準に落ちた。

ラテンアメリカの国内総生産の伸びは、一九八一年にわずか一・七%、一九八二年にはマイナス一%、一九八三年にはさらに三%下がった。一九八四年の二・六%の伸びは、先の低下を埋めるには不十分であった。

ラテンアメリカとカリブでは、五六〇〇万人が失業、五四〇〇万が不安定雇用にあることが指摘された。ラテンアメリカ人民の少なくとも四〇%が、貧困線ぎりぎり、三〇%がこれ以下である。

会議の宣言はこう述べている。

「参加者のすべては、対外債務が現在の危機のもっとも悲劇的表れ、そのもっとも重要

な要因であることを明らかにした。なぜなら対外債務は、危機を悪化させていくばかりでなく、貸出銀行であるIMF、およびこの機関での決定を行う工業国の政府への従属を強めることによって、わが諸国民、とくに労働者を、生活水準低下に導く耐えがたい制約的政策に従属させ、わが諸国の主権を制限して、発展へのいっさいの可能性を阻止し、経済復興を妨げている。」

債務はなぜ増えるのか

参加者はまた、ラテンアメリカの債務の急速な増大のもっとも重要な側面と原因も分析した。かれらは、資本主義工業国と発展途上国間の現在の不当な国際経済秩序を支配する諸原則にその原因があると指摘した。とくにその原因は、産品をいっそう低価格で売り、製産品をいっそう高価格で売るという不平等な交易条件にある（一九八四年だけで、約二〇〇億ドルの損失があった）。その他には、国際市場で競争力のない製産品への補助に基礎をおく資本主義工業国の保護貿易主義がある。こうした慣行はみな、自由貿易の旗をふるアメリカ政府やEEC諸国政府の偽善的いい分として矛盾している。

高金利とドル高が一体となった影響——高金利の支払いの結果として、この地域の諸国経済の負担は四五〇億ドル増える——は資本の逃避を増大させ、これはこの期間に一〇〇億ドル以上に達し、インフレを悪化させた。

カストロの演説

フイデル・カストロ議長は、債務危機の深い分析をし、帝国主義と新植民地主義勢力がラテンアメリカに押しつけている不当な経済関係にふたたび注意を喚起した。

例えば、彼の指摘のとおり、錫の場合、輸出国に支払われる価格は一ポンド六ドルであるが、今日のあわれな賃金による生産コストは一四ドルをこえており、もし賃金をまともに支払えば、生産コストは三〇ドルになる。いいかえれば、生産国は、生産コスト実額の五分の一で輸出しなければならないのである！カストロ議長はいった。

「今こそ、新国際経済秩序を実施しなければならぬ。さもなければ、何も変わらない。債務の原因は何か。錫一ポンドに六ドルを支払い、われわれには一台のブルドーザーに天文学的数字の金を支払わせている。これこそ歴史的で、数世紀におよぶ略奪である。二〇年前、かれらは鉱山で一台いくらのブルドーザーを使っていたか。二万ドルである。今市場でそれを買おうと、八万ドルする。このブルドーザーとか、すでに工場や病院で使っている設備に、今までは数倍支払わなければならない。錫一ポンドに六ドル払っているが、これらの生産には飢餓賃金でさえ一四ドルかかっているのだ。」

カストロ議長はまた報告で、この債務の大部分は民間大事業家が「再循環」させ、国外へ流していると次のように述べた。

「世界銀行は数日前に報告を出し、最大の債務をもつラテンアメリカ諸国の一つでは、この国に入ってきた金の一二六%はすでに国外に流れ、他の大債務国の場合には、入ってきた金の四〇〜五〇%が流出してしまった。

たとえば海外に資金をもつメキシコの億万長者に、その債務を支払えとは誰も要求していない。それどころかかれらは、メキシコ、アルゼンチン、ウルグアイ、ベネズエラ、ブラジルの国民に——他でもない国民に対してである——それを支払えと要求し、他方医療サービス、教育、仕事を奪い去っている。」

ラテンアメリカ人民のくびき

ハバナ会議での労働組合代表は発言で、債務危機がいかにか今世紀の恥すべき行為の結果であるかを、生き生きと語った。ある国の場合には、国家は大独占から民間の債務をひきつぎ、返済義務を追うように迫られている。しかし、その金額はすでに国外に流出し、今はアメリカの銀行の個人口座に預けられている。

他の代表は、借り入れた金額のなかで開発目的に使われた額はただの1%もなく、それは弾圧政権用の武器を買うために浪費され、着服され、使用された。したがって、多国籍銀行と独裁政権との結託を公然と調査する必要がある。

会議はまた、多国籍企業と銀行が発展途上国の資源を吸いつくしている不当で不公平な方法を終わらせる観点から、国際経済関係のいっそう広範な問題を検討する必要性に注意を喚起した。

会議はこの債務危機を、「ラテンアメリカとカリブ労働者と諸国民の首にまわされたひも」だととえた。それを少しでも引けば死んでしまう。脱出する唯一の道は、断固さ、尊厳、統一、連帯をもって立ち向かうことである。

今すぐ債務のモラトリアムを

参加者の圧倒的多数は、債務の棒引きを公然と表明した。その他の労働組合員も、モラトリアム、返済の即時中止、一定の年月の利子を含めた返済の延期を含め、これを変えた形の要求を提出した。そうした意見があったものの、支払いは不能だということでは全員意見は一致した。

モラトリアムの選択は、今日、ラテンアメリカ・カリブにおける経済回復、雇用、教育、健康、社会保障の水準の向上にむかうための、欠くことのできない前提条件である。またさらに、多国籍資本につくす金融機関の圧力を排除し、その政治的経済的将来への真の主権を行使するための前提条件である。参加者はまた、債務と利子の棒引き、モラトリアム、支払いの即時中止あるいは一定年月の延期は、この地域の民主的過程を続けていくのに不可欠であると強調し、また多国籍企業やかれらが支配する国際金融機関による債務回収の画策が続くなら、労働者や大衆に耐えがたい状態がもたらされるため、全般的に社会的動乱が起こるだろう。

会議の最後に出された宣言は、「IMFの押しつける条件に英雄的に抵抗しているこの地域の一部の諸国民は、とうに限度をこえている事実をはっきりと強調した」と述べている。

労働組合の主要な要求

それゆえ会議は、次の要求をめざす地域的統一行動を提案した。

—— 対外債務の棒引き、モラトリアムの宣言、支払いの即時中止、あるいは利子を含めた債務支払いの無期延期。

—— 新国際経済秩序の樹立。

—— 諸国の発展と独立に役立つようなラテンアメリカとカリブにおける経済的統合形態への前進。

会議の最終文書は次のように強調している。

「この地域の労働者と諸国民が非常に打撃を受けている危機の深刻さから考えて、会議

に参加している労働組合幹部はまた、これらの目標を実現するためには、さまざまな傾向の労働組合運動が、それぞれの立場を侵害することなく、また歴史的責任の観点およびわれわれを鼓舞するラテンアメリカとカリブの精神の発露として、わが組合員と諸国の権利の擁護により効果的に貢献できるような、幅広い実際的一致点を見出すため活動し続けることが、絶対的に必要であると指摘した。」

会議の参加者は、軍拡競争および経済危機で悪化している干渉と軍事侵略の政策は、対外債務に否定的影響をおよぼし、発展に必要な資源を浪費していると強調した。したがって、かれらは、軍事支出削減の闘争は、諸国民の発展と平和への闘争と分かちがたく結びついていると強調した。

債務反対行動デー

会議は、ラテンアメリカとカリブのすべての労働者、すべての労働組合組織にたいし、「対外債務およびわれわれ諸国の社会的経済的生活への悲惨な影響に反対する一〇月二三日の地域行動デー」の実施をよびかけた。

会議で出された論点、問題、行動提案は、その性格からいって地域的関心をこえ、すべての地域と国の労働者、労働組合の大きな関心事である。債務危機は、帝国主義と新植民地主義の押しつける不公平で不当な経済関係の生み出したあらゆる否定的要因をいっそう拡大しているし、新国際経済秩序を確立し、完全平等と互恵の立場を基礎にして、発展への全面的な経済協力推進の道を見出すための、緊急行動の必要性を明らかにした。したがって、ハバナでの対外債務会議も、新国際経済秩序推進のための国際的労働組合統一行動の発展に寄与するものであった。

◇読者からのおたより◇

社会主義日本をめざし、階級闘争をともにたたかおう。地方でもがんばってるヨ。

(福島・I)

現状況の変革のために、ともに(社会通信は)がんばろう。

(東京・S)

お元気ですか。昭電はアルミがだめだということで人員整理の動きがあります。私も労働者としてがんばります。

(神奈川・K)

「江田氏は、大変なあやまちをおかしてる。この憲法がもし、『社会主義の新しいビジョン』なら、社会党のやる憲法を守る闘争は、直接に社会主義革命ということになる。もっとも、革命でもなく、社会主義でもないものを、革命や社会主義の『ビジョン』と描き出すところに、改良主義のからくりがあるといえ、それまでのことである」(一九六二年、向坂逸郎)。二五年前の改良主義の亡霊が、いま社会主義運動・労働運動を襲っています。社会党・総評の右傾化を阻止するために闘いましょう。

(福島・W)

いつも正しい指針にもとづく情報と考え方を提供していただいて、たいへんためになります。それにつけても、社会党大会の「新宣言」には腹の底から怒りを覚えます。下部ではとても三分の二の賛成を得られる状況にはありません。もともと代議員付与の決定の段階から、またいるのです。なんとしても「新宣言」は認められません。(北海道・T)

(東京・O)

歴史に残る一年であることはまちがいない年でしょう。ともにがんばりましょう。

(茨城・A)